

会期：2021年10月6日～10月24日

けいはんな記念公園 ギャラリー月の庭

審査員：京都芸術大学 総合造形コース教授 柴田純生 先生

京都芸術大学 油画コース教授 奥田輝芳 先生

※ 各、敬称略

審査員 最優秀賞



『KANOTO』 A.N

<審査評>

今年の審査は難航しました。写真とコメントでの1次審査とは違い展示作品を見ながらの2次審査はより慎重になります。やはり実物は作者の気持ちを伝えてくれその重みを強く感じます。それ故様々な視点での良さがそれぞれの作品から伺え、会場に並んだ作品を詳しく見れば見るほどに賞決めには苦労しました。その中でキラリと光る作品が受賞作の「KANOTO」でした。この作品は昨年引き続きの受賞（昨年は優秀賞）となったのですが、独特の技法を用いながら昨年からのさらなる挑戦の跡があり、それは構想や表現の単純化に新たな工夫が見られたことが評価されました。主題の牛は「辛丑」から来ています。そのデフォルメされた元気な牛を大胆に画面中央に配し、月と思しき黄色い球体が空間を無視するかのようには跳ね回る構想から、力強さだけではない屈託のない伸びやかさと清々しさを感じました。花の表現などに類型化を見ることができ、その点には今後の課題も発見できそうなところもありましたが、素材のカシューや顔料は色彩的にも夜の質感を表現する上でとても効果的でした。

初出品初入選の方もいらっしゃる中、常連組もその都度新しい構想で新鮮な作品を出品されており、この展覧会が着実に前進していると感じます。来年も皆様の力作を期待します。

審査員：奥田



『MOVE ON』
AAYA

< 審査評 >

一見してなんとも愛らしく、かわいらしい印象を受ける作品です。月をテーマにして竹取物語のかぐや姫を連想し、水景園から公園のジャングルジムを思い浮かべ、女の子がどこかに行こうとする引っ越しの雰囲気表現するなど、作者のコメントからも素直な制作意図が感じられます。画面全体の平面構成もみごとに均一化されており、多彩な色使いや細かな形態の組み合わせに作者の独自の感性があらわれています。見る人の感受するちからとも相まってさまざまに、また楽しく鑑賞することができる作品です。つぎの展開を期待します。

審査員：柴田



『月の花』
中村 幹

< 審査評 >

とにかく迫力満点の陶芸作品です。その重厚な存在感には圧倒されます。陶芸は1200度以上の高温で焼成するわけですからひび割れ、変形、釉薬の溶け具合などさまざま問題を解決しないとはいけません。実際、窯を開けるまで緊張の連続でしょう。それだけに高い技術、豊富な経験が必要です。中村さんの作品「月の花」はそれらの要素が凝縮されています。多様な釉薬の色使い、巧妙で大胆な造形、そして独自のテーマ設定とその具体化に作者の独自の作品構成力を感じます。これからも大いに制作に励んでください。

審査員：柴田



『月と鳥』
飯田 智子



<審査評>

夜空を見上げ大きな白い月をじっと見つめていると黄色く見えたり赤っぽく見えたりすることがあります。暗い中、目を凝らしていると目がチカチカして色々な光が見え、そんな錯覚の世界を表現している作品です。と作者はコメントしています。黄色やオレンジの丸い形はおそらく月の周りの光でしょうか。モノクロの画面に暖色系の円形の色彩、それだけでは単なる月の説明になってしまうかも知れません。しかしその月の表現よりも線で表現された模様のように見える線描の造形がまさに目に錯覚をもたらします。本当に近距離で虫眼鏡でもないとその線の克明な表情が見えません。どうやって描いているのでしょうか。作者の強烈な集中力で描かれた線がまた次の線を生んでいる様子は増殖する生き物のようです。今は額に閉じ込めていますが、その生命力が額という枠を超えもっと大きな平面へと広がり、月を飲み込むほどに展開して行くと新たな作品の地平が見えてくるように思います。

審査員：奥田